

「人類社会の進化史的基盤研究(4)」 第1回研究会

日時：2015年6月28日（日）13:00-19:00

場所：AA 研マルチメディアセミナー室（306）

報告者:

1. 趣旨説明：河合香吏（AA研）
2. 少し長めの自己紹介：全員
3. 本共同研究課題に向けての話題提供：
 - 1) 竹ノ下祐二（AA研共同研究員、中部学院大学／霊長類学）
 - 2) 杉山祐子（AA研共同研究員、弘前大学／生態人類学）
 - 3) 春日直樹（AA研共同研究員、一橋大学／社会文化人類学）

内容（要旨）

1. 趣旨説明（河合香吏）

本共同研究課題は、2005年度から「人類社会の進化史的基盤研究」として、(1) 集団（2005-2008年度）、(2) 制度（2009-2011年度）、(3) 他者（2012-2014年度）、と主たるテーマをかえて3期10年にわたって展開してきた共同研究の第4期にあたる。また、一連の共同研究は今期でいったん閉じる方針であるため、その総括としての意義をも兼ね備えている。

一連の共同研究は当初から長期プロジェクトとして企画され、群居性の霊長類の一員としての人類が進化の過程で獲得してきた高度な「社会性（sociality）」を種の誕生における最重要の特質として着目しようとするものであった。「社会性」なるものは、精神や社会の進化と同様に、化石として形に残りにくいものであるため、ヒトの社会とヒト以外の現生霊長類の社会との比較・検討が不可欠であった。そのため、霊長類学者と人類学者との共同研究が強く求められ、両者の共同討議として進められてきた。

今期は上記一連の共同研究の総括をするにあたり、「生存・環境・極限」といったやや広いテーマを中心課題として設定した。これは、研究主題としては「生存」を主軸とし、「生存（「生きる」ということ）の環境」を、その「極限」条件ないし「極限」状態まで見据えるものとした。ここで言う環境とは、生態学的かつ社会的であるような環境を指すが、そうした環境に「生きる」ことのぎりぎりの条件ないし状態を探ることを念頭に、これまでと同じ3つの学問分野である、霊長類社会・生態学、生態人類学、社会文化人類学からこの課題に迫りたい。

これまでの一連の共同研究は、ヒトを含む霊長類が適応したり発達させたりしてきた自然的／社会的環境を「舞台」ないし前提として展開されてきたものであり、複数の同種個体がともに<生>をはぐくむ術、生態学の用語を使えば「生存戦略」だが、そうしたものを明らかにすること、そして、人類が高度に発達させてきた「社会性」(sociality)の起原と進化の機構について考察することを目指してきた。

生物としての〈生〉（「生存」と言っても「生命」、「いのち」と言ってもよいが）、すなわち「生きる」ということは、まずは生物学的／生態学的に論じられるものだが、それに一元的に還元することはむずかしい。とりわけわれわれ人類を含む霊長類が群居性動物として生きる存在である以上、そこには社会的なるものが必然的な要素としてあり、他者と「ともに生きて」いかねばならないということ、そしてそれ故に、その方法（生存戦略）は、非決定論的で、フレキシブル（可変的）で、コミュニケーションナルなものになると思われる。こうした性格については、すでに「集団」、「制度」、「他者」というこれまでの共同研究においても議論され、明らかにされてきたことでもあるが、この点に議論を焦点化して、人類の社会性の進化の解明に向けて新たな視座を追究していきたい。

本研究課題ではこれまでの一連の共同研究において明らかになっていたことを基盤として、その総括として、ヒトとヒト以外の霊長類の生物学的、生態学的環境の極限、および社会性の極限を詳らか（つまびらか）にしていくことを通じて、人類社会における〈生〉＝「生きること」の進化史的基盤を考えていくことを目指す。

以上のように、環境の極限を明らかにするとどのような学問的貢献があるかということの、より積極的な意義についても触れておきたい。まず、進化を遂げてきた社会の各段階のすべてに常に存在する「基盤」なるものが果たして何であるのかを明らかにすることから、それは、「社会論」一般に寄与することになるだろうということが挙げられる。同時にそれは、社会のさまざまな危機、たとえば、急激な危機としての災害や戦争や大旱魃、あるいはゆっくりとした危機としての、たとえば、限界集落の出現や人口減少から生まれる問題群の中で、社会の中の何を重視するべきかの指針や判断を与えてくれるのではないかと、いったことが挙げられる。

具体的に関連する現象として想定できるとして現象としては、環境／生態系破壊ないし保全や異常気象、生物多様性、絶滅危惧、生涯、一生、生死、生命倫理、限界集落、人口減少、等が挙げられるが、どのような現象に目を向けることになるのか、どのような現象が中心的な課題になっていくのかは、始めてみなければわからないし、それでよいと思っている。

本課題は一連の共同研究において通奏低音としてあった「環境」と、そこでの「生存」を意識化し、その極限的な局面を詳らかにすることを通して、人類の社会性（sociality）の進化についての理論構築を目指す試みである。初年度である本年度は、それぞれ個別の発表をしつつ、3つの学問分野において、「生存」、「環境」、「極限」といった概念がどのように扱われてきたか、あるいは、扱われうるのかを明確化し、これをメンバー間で、共有することを第一の目的とする。そのうえで、「環境における生存」をキーテーマに、その様態の極限を見定めるための方法を検討したい。

2. 省略

3. 本共同研究課題に向けての話題提供：

3. 1) 日常が崩壊するとき：霊長類学から「生存の環境の極限」を考えるためのメモ（竹ノ下祐二）

この研究会は、「生存」を主軸にして、「生存の環境」をその「極限」条件まで見据え、生態学的・社会的環境に生きることのぎりぎりの条件と状態を探ることを念頭に、霊長類社会/生態学、生態人類学、社会文化人類学の3分野から統合的に迫ることを目的としている、らしい。「生存の環境の極限」とは何だろうか。

「生存」を個体や社会集団、あるいは種が生きのびることと捉えると、生存の終焉とは、個体の死、集団の消滅/崩壊、個体群の絶滅、種の絶滅などである。煩雑になるのでこれらをひっくるめて「死」と呼ぼう。「生存の環境の極限条件」とは、この一線を超えると死が訪れる、というような境界のことだと考えればよいのだろうか。

だが、「死」はいつけん「生」の対義語のように思われるが、「生」の一部、「生」に織りこまれていた事象と捉えることもできる。ニホンザルやチンパンジーの単位集団は世代を重ねて存続するが、そのした時間・空間スケールで眺めると、個体の死は日常のひとコマである。同様に、集団の消滅は地域個体群の歴史の中で、地域個体群の絶滅は種の歴史の中で、種の絶滅は系統の進化史の中で、ありふれた日常の「生」の一部となる。こう考えると、人類社会の進化史的基盤を探る本研究会で、単に「死」を「生」の彼岸に位置付け、その境界を「極限」とするのは具合が悪い。

非ヒト霊長類における「生存の環境の極限」を考える糸口として、本発表では「危機」について考える。霊長類学からみる危機をテーマとした、日本文化人類学会課題研究懇談会「危機の克服と地域コミュニティ」第9回研究会(2015年2月開催)において、五百部裕はマハレ山塊におけるアカコロブスを題材に議論を展開し、非ヒト霊長類には「危険」はあっても「危機」は存在しないのではないかと考察した [1]。マハレのアカコロブスはチンパンジーに捕食される。五百部によると、かれらは実際にチンパンジーに捕食されそうになると逃げたり抵抗したりするものの、チンパンジーに対して特段の対捕食者戦略を発達させているわけではないという。つまりアカコロブスにとって、チンパンジーによる捕食は日常に織り込みずみの事象であって、コミュニティレベルで「このままでは滅びてしまう」という危機感が共有されてはいないというのだ。そして、一般に非ヒト霊長類がそうした「危機感の共有」をおこなうかどうかは疑わしい。

コメンテーターであった私は「危険」と「危機」の違いを次のように考察した。危険 (**danger**) は「いま・ここ」に実在するが、危機 (**threat**) は想像力の産物である。危機とは、まず「いま・ここ」の状況から未来における滅亡を予測し、そのうえであらためて「いま・ここ」を未来と関連づけ「いま・ここ」のわれわれが、その線を越えたら不可避免的に滅亡に向う境界線 (**threshold**) 上に位置すると再解釈したときに感じられるものである。このとき、境界線は実在ではなく、あくまで現実の解釈にともない創り出された想像の産物である。

そのように想像された境界線を「生存の環境の極限」と言い換えることが妥当なのかどうか、私にはよくわからないが、ここではとりあえずそう考えて先へ進むことにする。非ヒト霊長類は境界線を想像し創造することがあるのだろうか。あるとしたら、どのような状況だろうか。

物言わぬかれらの想像力は行動から推測するしかない。非ヒト霊長類が現在を「日常」の浮き沈みのひとコマではなく境界線を越えんとしている状況だと解釈したならば、かれらは日常的な対応を停止し、あらたな戦略を採用するはずである。したがって、非ヒト霊長類が危機的状況=極限状況にあるかどうかは、観察者からみてかれらが「死」に近いところにいるだけでは不十分で、その際にかれらが日常とは異なる振舞いをしているかどうかを検討する必要がある。そのような事例を4つ紹介したい。

一つ目の事例は、屋久島における群れの消滅と融合 である [2, 3]。屋久島のニホンザルは群れ密度が高く、群れの消滅がしばしば観察される。その際、すべてのオスを失ない最後に残されたメスが、隣接する群れに平和的に加入することがある。ニホンザル社会では、群れを移籍するのは通常オスのみである。

二つ目は、カフジ・ビエガ国立公園のヒガシローランドゴリラでみられた、複数メスの合同移籍である [4]。1990年代後半、内戦によって多くの核オスが殺害された際、メスたちが核オス抜きでまとまりを維持し、そろって他の集団に移籍したり、ヒトリゴリラを迎え入れて単雄群を再構築した。ゴリラでは、メスは個別に核オスとの関係を構築しており、通常メスたちが連れだって集団を移籍することはまれである。

三つ目は、嵐山のニホンザルにおける、アルファオスの交代にともなうアルファメスの行動変化である [5]。たてつづけにアルファオスが交代した群れで、通常は限られた血縁個体とした毛づくろいをしないアルファメスが、多くの非血縁メスと毛づくろいを行なうことで、結果として群れのまとまりを維持する役割を果たした。

四つ目は、東山動物園で、人口哺育されたゴリラのアカンボウの再導入プロ

セスにおいて見られた、シルバーバックとアカンボウの抱擁である。母親による後ろだてのないアカンボウと同居をはじめたシルバーバックが、ある日おもむろにアカンボウをしっかりと抱擁したのである。

これらはいずれも、集団が崩壊したり秩序が乱れた際に、通常の世界構造・社会関係からは見られないような社会交渉が発現し、それによってなんとか集団が維持され、日常をとりもどした事例であると理解することができる。すなわち、日常が崩壊した際に非日常的な振舞いが発生し、それによって日常に回帰したといえる。特筆すべきは、こうした非日常的な振舞いが個体レベルではなく社会的反応として見られたことである。ここから、非ヒト霊長類においても、日常の崩壊すなわち危機的状況の認識と、その認識に関して社会の中にある種の「了解」が成立している可能性が示唆される。

References

- [1] 五百部裕. 殺されることは『危機』なのか？—アカンボウの対チンパンジー戦略—. 日本文化人類学会課題研究懇談会「危機の克服と地域コミュニティ」第9回研究会（2014年第3回研究会）2015年2月12日，名古屋大学文学研究科，名古屋市.
- [2] Yukio Takahata, Shigeru Suzuki, Naobi Okayasu, and David Hill. Troop extinction and fusion in wild japanese macaques of yakushima island, japan. *American Journal of Primatology*, Vol. 33, No. 4, pp. 317–322, 1994.
- [3] Hideki Sugiura, Naoki Agetsuma, and Shigeru Suzuki. Troop extinction and female fusion in wild japanese macaques in yakushima. *International Journal of Primatology*, Vol. 23, No. 1, pp. 69–84, 2002.
- [4] Juichi Yamagiwa, John Kahekwa, and Augustin Kanyunyi Basabose. Infanticide and social flexibility in the genus Gorilla. *Primates*, Vol. 50, No. 4, pp. 293–303, October 2009.
- [5] 竹ノ下祐二. 政権交替と α メス群れの統合維持に関わる α メスの役割. モンキー, 250–251, pp. 5–11, 1993.

3. 2) 「生存・環境・極限」：生態人類学から考えるための話題集(杉山祐子)

1. はじめに

ヒトはその歴史のなかで、移動をくりかえして分布域を拡げ、集団の規模や構成のバリエーションも拡大してきた。そこには利用できる環境の拡大や食性の変

化、人口構造の変化などを伴い、ある場合にははからずも、ある場合には意識的な「技術革新」を生みながら現在の姿にたどりついたとみることができる。

ヒトと環境の相互作用の系を生計活動の詳細な検討から明らかにしてきた生態人類学の立場から考えるとき、「生存」は、時間幅および「集団」の単位や消費・再生産の単位を多層的にとらえることに関わってくる。

2. 生計活動と環境

生態人類学初期の研究は、現代の狩猟採集民が資源を使い尽くすことはなく、むしろ余裕をもって生活していることを明らかにした（田中 1971、丹野 1986）。それは長年にわたる知識や技術の蓄積があるから可能だともいえる。しかし狩りや採集活動で、「効率」が悪くなるとさっさと移動するというやりかたは（市川 1996）環境利用の基本形と考えてよいだろう。

ヒトと自然が相互に馴化しあう関係も特徴的である。熱帯雨林では狩猟採集民の伐木などの人間活動が植物の多様性を生み出している（市川 1996, 2010）。ミオンボ林帯では、火入れなどの人間活動が火に強い木々を育て、それらが作る環境が焼畑農耕の基盤となっている。結果的にではあれ、人間活動と自然が相互依存的に独特の環境をつくりだしてきたことがわかる。より積極的に自然に働きかけ、特定の循環を生み出すことによって成り立つ生業もある。マテンゴのンゴロ農法（加藤 2002）、アリのエンセーテ（重田 1996）やバナナ栽培（丸尾 2002）など多くの在来農法はその例である。

さらに、現代のヒトの生業にきわだつ特徴は、異なる自然環境下で異なる生業を営む人びとが「共生」や交易などを通じて、たがいの環境を自身の生活圏としていることだろう。寺嶋（1997）は、エフェが森での狩猟採集、レッセが村での農耕という異なる生業を営みながらも相互に深い関わりをもつことを示して、「森も村も自分たちの世界と接するもうひとつの世界であり、つまりは自己の世界を拡大するもの（寺嶋 1997：204）」と述べる。人間がその分布域を広げる過程では、それぞれの環境に適応した生業とその技術を開発してきたと考えられるが、自分たちとは異なる環境に異なる生業をもって暮らす他集団との関係を築くことによって、人間はその生存の可能性を大きくひろげたといえよう。

3. 生存と「極限」を時間枠と「関係」からみる

上記のことをふまえると、「極限」をかんがえるとき、異なる時間枠で、集団の生成・成長のサイクルや環境との関係を考慮に入れる必要があることがわかる。それは長期的時間枠と中短期的時間枠の2種類である。

長期的時間枠とは10年～30年以上で、世代交代を視野に入れた時間の長さを考える。ここでの生活の様態は移動と一定期間の定住の組み合わせによって成り立つ。移動と定住の組み合わせは、異なる自然環境利用の組み合わせとも対応しうるし、集団の規模や新しい集団の生成、他の集団との交易等を含めた相互扶助的関係の構築も関わる。次の3つの場合が考えられる。

- a) 極相的「極限」: 「集団」の発達段階における「極相」としての「極限」。人口規模や集団の構成が極相状態を示す。技術革新や新しい資源の開発などはあるだろうが、人口が一定以上に増加した場合、移動その他の方法による人口

コントロールがおこなわれる。また、他の生態環境圏とのセットで生活圏が構成される場合も考えられる。

- b) 展開の「極限」：この場合はさらに、2つのサブタイプが考えられる。
- ①集団サイクル・循環型：集団の組成が次のサイクルに移るときの「極限」。ベンバの村の例では、新しい村が創設されて発展するが、世代交代期にはもめごとが起きて分裂、その後、また新しい村が創られる循環をくりかえす。
 - ②分蜂・フロンティア型：マテングなどの例がこれにあたる。中心村の人口密度が高まると、中心村とは異なる手法で未開拓地に新村を作り、フロンティアを開発しながら展開する。
- c) 消滅の「極限」：生存のぎりぎり。干ばつや飢饉、疫病等による人口減少、他集団との抗争による集団の消滅などが考えられる。ただし、資源が少ないことが必ずしも人びとを競合に向かわせるわけではない。また、こうした消滅にむかう「極限」をきりぬける方がフロンティアを開拓し、移動や食性の変化を伴いながら新たな適応の様態を生み出す可能性もある。

中短期的時間枠での「極限」を考えるには、消費の単位の幅（ひとり・母子・炉帯と世帯、「共食」を許す単位を日常的な文脈と飢饉などの危機的（極限）状況下の文脈でとらえることや、日常的にみられる小さな極限（日常における社会的葛藤、呪い、暴力など）を個人と中間的集まり、集団全体、および集団間関係など多層的に検討する必要があると思われる。

5. まとめ

以上、生態人類学から「生存・環境・極限」をかんがえるとき、1) ヒト＝環境系を長期的なスケールでの移動・定住を含むダイナミズムとしてとらえる生態史的視点、2) 日常における多様な消費の単位の組み合わせと生存の単位を多層的にとらえる視点、3) 環境の大きな変化など現代の諸課題を組み込む視点などが重要である。

引用文献

- 市川光雄 1996 「文化の変異と社会統合 — ムブティ・ピグミーの植物利用にみられる変異」 田中・掛谷・市川・太田編『続・自然社会の人類学』アカデミア 出版会：409-437
- 2010 「アフリカ熱帯雨林の歴史生態学に向けて」『森棲みの生態誌』京都大学出版会
- 重田眞義 2002 「アフリカにおける持続的な集約農業の可能性」掛谷誠編『アフリカ農耕民の世界』京都大学出版会
- 田中二郎 1972 『ブッシュマン』思索社
- 寺嶋秀明 1997 『共生の森』東京大学出版会
- 丸尾聡 2002 「バナナとともに生きる人びと—タンザニア北西部・ハヤの村から」掛谷誠編『アフリカ農耕民の世界—素の在来性と変容—』京都大学出版会

3. 3) 「社会文化人類学における『生存』」(春日直樹)

社会文化人類学の歴史を3期に分けることにより、各期で生存がどのように論じられてきたのかを編年的に総括して、今後の研究方向について話題提供をおこなう。なお、ここでいう「生存」とは、極限的な状況を配慮しつつ生きるという意味である。

(1) 1870年代～1910年代

社会文化人類学が学問として確立した時期であり、進化主義や伝搬主義などさまざまな立場から、人類の社会と文化を論じる研究が現れた。とくにイギリスでは、エドワード・タイラーの『原始文化』やジェームズ・フレーザーの『金枝篇』が、進化の観点から洞察を展開した。ともに壮大なスケールで人類史を振り返り、とりわけ人間の思考の進化を明らかにしようとしたが、そこでは「死」「屍体」「睡眠」「夢」「影」などが中心的な契機となって思考を活発化した、とされている。すべて人間の生存にかかわる重大事項であるがゆえに、人びとを捉えてはなさなかったわけである。

この時期の社会文化人類学を特色づけるのは、長期的な視野に立った分析であり、同世紀の他の諸分野にも容易にみいだすことができる。とくに経済学は長期に経済の成長を論じるがゆえに、生存かつかつの生活を将来の到達点とするような「陰気な科学」であった。『金枝篇』の最後は陰気とはいえないが、生存に対する不安を宇宙大の規模で描いており、同時代の知識人に多大な影響を及ぼした。

この時期の研究から学ぶものとは、数世紀・数十世紀あるいはさらに長期の視野から生存を論じる姿勢であり、さらにはタイラーの「文化」概念のような総合的な観点である。

(2) 1920年代～1980年代

社会文化人類学は専門性を高めて、現地調査に力点を置いた詳細なデータ収集と緻密な分析が主流となった。調査期間の限定があり、かつ調査対象の歴史的資料の乏しさもあって、研究は総じて長期的な視野を失った。ちょうど経済学において1923年のケインズが長期的アプローチを批判し、「長期には〔＝結局のところ〕われわれは皆死んでしまう」(『貨幣改革論』)として短期的アプローチを唱道した頃と重なるが、経済学がこれによって生存の危機に瀕した人びとを救おうとしたのに対して、社会文化人類学はむしろ、調査地の人びとの生活が生存維持のために営まれているのでなく、彼ら固有の価値や規範や動機などに基盤を置くことを主張するようになったので、生存というテーマへの直面を避ける傾向が生まれた。食糧不足を扱った民族誌も数は数少なく存在するのだが、一般的にいえば生存に言及しない記述スタイルが主流を占める。

生存の危機に瀕している状況は、むしろ植民地化や貨幣経済が引き起こす例外的なものとして扱われたといえる。この点は、マーシャル・サーリンスが提起した「最初の豊かな社会」の概念によく現れている。そこでは、採集狩猟民の労働時間の短さ、余暇の長さ、食糧に関する楽観的な姿勢を強調する一方で、食糧事情を心配する採集狩猟民については言及しないまま、ただ現在の彼らが辺

境に迫いやられた特異な状況にある点を指摘している。

(3) 1980年代後半～現在

第二期で生存の問題にふれた数少ない民族誌は、その状況で文化がどのように変容し、あるいは再構築されるかに主眼を置いていた。これに対して近年では、「生存を文化的状況として考察すること」「生存としての文化」をめぐる研究が着実に現れつつある、ということができる。それらを大きく分類すれば、「プロジェクト」研究と「生社会」研究になろう。

「プロジェクト」研究とは、災害、気候変動、生物多様性などに関する大型プロジェクトの設計・実践・評価のプロセスを対象にして、大なり小なり科学技術論とくにアクターネットワーク理論 (ANT) の影響を受けている。生存の危機とかかわるプロジェクトではあるが、結局は何らかの「発展」を目指しているので、生存の問題から遠ざかるようになってしまう（ただし、難民キャンプを対象にしたプロジェクト研究については、こうした特徴づけはできず、全般的にオーソドックスな民族誌的な形態をとることが多い）。

「生社会」の研究の具体的なテーマは、不適切な診断と治療、特定の疾病のステイグマ化、際限のない延命措置、過剰な薬物投与、ローカルな病気の放置、伝統的な療法の抑圧と消失、臓器売買、信仰に反した屍体処理、など実に多岐にわたる。不安や危険にさらされる身体や人格がどのようにして生まれるか、そしてこの苦境の中でいかに主体としての自己を再構築するかに主眼が置かれている。ただしポール・ラビノーなどの一部をのぞけば、「生社会」「生権力」あるいは「むき出しの生」といった流行の概念を使用することを避ける傾向にある。こうした表現自体がすでに特定のイメージを喚起する意味で文化である、という認識をもつからであろう。

以上のように社会文化人類学の研究を編年的に振り返れば、生存の問題を文化の観点から研究すべし、という結論を導けそうな気がするが、このまま受け入れるのは抵抗がある。文化と自然という二項対比自体が、「科学」対「人文学」という西洋近代の知識に関する二分類に由来している。これに対するラディカルな批判として、近年は「多自然主義」を提起する人類学者もでているが、残念ながら説得力に乏しい。

とりあえずは、社会文化人類学の慣れ親しんだ民族誌において、生存を直接にテーマ化しないが生存の問題と不可分である記述があちこちに散りばめられていることに、注意を喚起したい。人類学者が人びとの生活を総体的に理解しようとするかぎり、そこには生きること、死ぬことにかかわる事象が当然ながら観察できる。生存の問題は、宗教、呪術、親族などの諸領域に分かれてすでに民族誌的に記述されている。これらの記述から生存の問題を掘り起こし、たとえば「生社会」「むき出しの生」がテーマ化される状況における生存と比較する作業は、それなりに有意義であろう。